2026年4月5日

主日礼拝

《イースター礼拝》

礼拝讃美歌⇒165番（旧52番）（MK姉）
『主は墓より』

聖書⇒マタイによる福音書28章1~9節（MM姉）
『さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。』

（祈り）

礼拝讃美歌⇒164番（旧222番）
『墓の中にいと低く』

聖書⇒ローマの信徒への手紙10章13~14節（KT姉）
『「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。』

聖書⇒ヘブライ人への手紙 11 章 1~2，6 節
『信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。』

（祈り）

聖書⇒詩編 16 編 1a，9~11 節（NH 兄）
『【ミクタム。ダビデの詩。】

わたしの心は喜び、魂は躍ります。
からだは安心して憩います。
あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく／
あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず
命の道を教えてくださいます。
わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い／
右の御手から永遠の喜びをいただきます。』

聖書⇒使徒言行録 2 章 30~32 節
『ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、／
『彼は陰府に捨てておかれず、／
その体は朽ち果てることがない』／
と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。』

（祈り）

礼拝讃美歌⇒167 番（旧 223 番）（KH 兄）
『救いの主はハレルヤ』

《パン裂き》

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 10 章 16~17 節（KH 兄）
『わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。』

（式）

礼拝讃美歌⇒142 番（旧 58 番）
『渡されたもう』

《建徳》

聖書⇒ヨハネによる福音書 1 章 1~2 節（CN 兄）
『初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。』

聖書⇒箴言 8 章 22~31 節
『永遠の昔、わたしは祝別されていた。
太初、大地に先立って。
わたしは生み出されていた／
深淵も水のみなぎる源も、まだ存在しないとき。
山々の基も据えられてはおらず、丘もなかったが／
わたしは生み出されていた。
大地も野も、地上の最初の塵も／
まだ造られていなかった。
わたしはそこにいた／
主が天をその位置に備え／
深淵の面に輪を描いて境界とされたとき
主が上から雲に力をもたせ／
深淵の源に勢いを与えられたとき
この原始の海に境界を定め／
水が岸を越えないようにし／
大地の基を定められたとき。

御もとにあって、わたしは巧みな者となり／
日々、主を楽しませる者となって／
絶えず主の御前で楽を奏し
主の造られたこの地上の人々と共に楽を奏し／
人の子らと共に楽しむ。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 1 章 14 節
『言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。
それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。』

聖書⇒使徒言行録 1 章 9~12 節
『こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。』

聖書⇒ヨハネの黙示録 1 章 12~18 節
『わたしは、語りかける声の主を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見え、燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎、足は炉で精錬されたしんちゅうのように輝き、声は大水のとどろきのようであった。右の手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出て、顔は強く照り輝く太陽のようであった。わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった。すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。』

聖書⇒ゼカリヤ書 14 章 3~4 節
『戦いの日が来て、戦わねばならぬとき／
主は進み出て、これらの国々と戦われる。
その日、主は御足をもって／
エルサレムの東にある／
オリーブ山の上に立たれる。
オリーブ山は東と西に半分に裂け／
非常に大きな谷ができる。
山の半分は北に退き、半分は南に退く。』

聖書⇒ヨハネの黙示録 22 章 13 節
『わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。
初めであり、終わりである。』

聖書⇒ヨハネによる福音書 11 章 28~35 節（KH 兄）
『マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。
イエスは涙を流された。』

聖書⇒ヘブライ人への手紙 2 章 14~15 節
『ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。』

聖書⇒コリントの信徒への手紙一 15 章 26、55~56 節
『最後の敵として、死が滅ぼされます。

死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」
死のとげは罪であり、罪の力は律法です。』

礼拝讃美歌⇒117 番（旧 149 番）
『カルバリの丘の辺に』

《建徳要旨》